

ランキン・セルバーグ級数の特殊値に関する ある平均について

源嶋 孝太 (京都産業大学)

1 主結果

この節で説明される記号は本稿を通して用いられる. 任意の自然数 n と $\text{mod } N$ の Dirichlet 指標 ξ に対して $\mathcal{M}_n(N, \xi)$ (resp. $\mathcal{S}_n(N, \xi)$) を指標 ξ , 重み k をもつ $\Gamma_0(N)$ に関するモジュラー形式 (resp. カスパ形式) のなす空間とする. モジュラー形式 $f \in \mathcal{M}_n(N, \xi)$ に対して, その無限遠点における Fourier 展開を

$$f(z) = \sum_{n=0}^{\infty} a_n(f) e^{2\pi i n z}, \quad z \in \mathfrak{H}$$

と書く. ここで \mathfrak{H} は上半平面である.

k, l を条件 $k \geq l$ をみたす自然数とし, χ, ψ を $\text{mod } N$ の Dirichlet 指標とする. このとき, モジュラー形式の対 $(f, g) \in \mathcal{S}_k(N, \chi) \times \mathcal{M}_l(N, \psi)$ に対して, Rankin–Selberg 級数 $D(s, f \otimes g)$ を

$$D(s, f \otimes g) := L(2s - k - l + 2, \bar{\chi}\psi) \sum_{n=1}^{\infty} \frac{\overline{a_n(f)} a_n(g)}{n^s}$$

により定める. ここで $L(s, \xi)$ は Dirichlet 指標 ξ に関する Dirichlet L -関数である. $D(s, f \otimes g)$ は半平面 $\text{Re}(s) > \frac{k+l}{2} + l$ で絶対収束する. さらに g がカスパ形式であれば収束域は広がり, $\text{Re}(s) > \frac{k+l}{2}$ で絶対収束する. よく知られているように $D(s, f \otimes g)$ は実解析的 Eisenstein 級数を含む積分表示をもち, その積分表示を通して $D(s, f \otimes g)$ は全 s -平面に有理型に接続される.

定理 A. $k - l \geq 2$ と仮定する. $\mathcal{B}_k(N, \chi)$ を $\mathcal{S}_k(N, \chi)$ の任意の直交基底とし, m を条件 $\frac{k+l}{2} - 1 < m < k$ をみたす整数とする. このとき, ゼロでない $g \in \mathcal{S}_l(N, \psi)$ に対して次が成り立つ:

1) $\frac{k+l}{2} < m < k$ のとき

$$\sum_{f \in \mathcal{B}_k(N, \chi)} \frac{a_1(f) D(m, f \otimes g)}{\langle f, f \rangle} = a_1(g) \frac{N\pi(4\pi)^{k-1} L(2m - k - l + 2, \bar{\chi}\psi)}{3(k-2)!} \prod_{p|N} (1 + p^{-1}).$$

2) $m = \frac{k+l}{2}$ のとき

$$\begin{aligned} & \sum_{f \in \mathcal{B}_k(N, \chi)} \frac{a_1(f) D(m, f \otimes g)}{\langle f, f \rangle} \\ &= \frac{a_1(g)}{3(k-2)!} \left(N\pi(4\pi)^{k-1} L(2, 1_N) \prod_{p|N} (1 + p^{-1}) - \frac{\pi^2(4\pi)^k}{(k-l) \left(\frac{k+l}{2} - 1\right)} \prod_{p|N} (1 - p^{-2}) \right). \end{aligned}$$

ここで $\langle \cdot, \cdot \rangle$ は Petersson 内積である.

$SL_2(\mathbb{Z})$ に関するモジュラー形式に対しては次のような先行研究がある:

	$\frac{k+l}{2} < m < k$	$m = \frac{k+l}{2}$
$N = 1$	Lanphier [2]	Ohta–Yagi–Gejima–Moriyama [3]

Lanphier は Maass–Shimura 作用素を用いて Rankin–Cohen ブラケットを表示し、その応用として上記の結果を得た. Ohta–Yagi–Gejima–Moriyama は異なる手法で上記の結果を得ている. 本研究では、Ohta–Yagi–Gejima–Moriyama の手法を他の臨界点に拡張して定理 A を得た. §3 でその証明の概要を述べたい.

主結果の簡単な帰結として次を得る:

系 B. ゼロでない $g \in \mathcal{S}_l(N, \psi)$ で $a_1(g) \neq 0$ をみたすものに対して、次をみたす $f \in \mathcal{S}_k(N, \chi)$ が存在する:

$$a_1(f)D(m, f \otimes g) \neq 0.$$

2 準備

次の節で主結果の証明を簡単に述べたい. そのために必要な記号や概念を復習する. 特に断りなく上半平面 \mathfrak{H} の元 z を (慣習に従って) $z = x + iy$ と書く.

2.1 概正則モジュラー形式

まず [5, §8] から概正則モジュラー形式の復習をしたい. t, k を非負整数とし, N を自然数とする. また, χ を $\text{mod } N$ の Dirichlet 指標とする. このとき次の (i), (ii) をみたす実解析的関数 $f: \mathfrak{H} \rightarrow \mathbb{C}$ の集合を $\mathcal{N}_k^t(\Gamma_0(N), \chi)$ と書く:

$$\text{i) } (f|_k \gamma)(z) := (\gamma_{21}z + \gamma_{22})^{-k} f(\gamma z) = \chi(\gamma) f(z), \quad \forall (\gamma = (\gamma_{ij}), z) \in \Gamma_1(N) \times \mathfrak{H},$$

ii) 任意の $\gamma \in SL_2(\mathbb{Z})$ に対して, $f|_k \gamma$ は次のような一意的な表示をもつ:

$$(f|_k \gamma)(z) = \sum_{\nu=0}^t y^{-\nu} \sum_{n=0}^{\infty} b_{\nu,n}(f, \gamma) e^{\frac{2\pi i n z}{N}} = \sum_{n=0}^{\infty} B_n(y; f, \gamma) e^{\frac{2\pi i n z}{N}}.$$

ここで $b_{\nu,n}(f, \gamma) \in \mathbb{C}$, $B_n(y; f, \gamma) := \sum_{\nu=0}^t y^{-\nu} b_{\nu,n}(f, \gamma)$ である.

このとき, $\mathcal{N}_k^t(\Gamma_0(N), \chi)$ の元は指標 χ , 重み k , 次数 t の $\Gamma_0(N)$ に関する概正則モジュラー形式と呼ばれる. $\mathcal{M}_k(N, \chi) = \mathcal{N}_k^0(N, \chi)$ であることに注意する. より一般に次の集合を考える:

$$C_k^\infty(N, \chi) := \left\{ f \in C^\infty(\mathfrak{H}) \mid f|_k \gamma = \chi(\gamma) f, \quad \forall \gamma \in \Gamma_1(N) \right\}.$$

任意の $f, g \in C_k^\infty(N, \chi)$ に対して次のような積分を考える:

$$\text{vol}(\Gamma_0(N) \backslash \mathfrak{H})^{-1} \int_{\Gamma_0(N) \backslash \mathfrak{H}} \overline{f(z)} g(z) y^k \frac{dx dy}{y^2}. \quad (2.1)$$

もし上の積分が収束するならば, それを $\langle f, g \rangle$ と書く. 特に, $f, g \in \mathcal{S}_k(N, \chi)$ であれば, 上の積分 (2.1) は収束し, $\langle \cdot, \cdot \rangle$ は $\mathcal{S}_k(N, \chi)$ 上の内積となることが知られている. これを Petersson 内積と呼ぶ.

2.2 Maass–Shimura 作用素と概正則モジュラー形式の正則射影

しばしば Maass–Shimura 作用素と呼ばれる $C^\infty(\mathfrak{H})$ 上の微分作用素 δ_r と ε を定義する. $r \in \mathbb{R}$ とする. このとき微分作用素 δ_r と ε が

$$\begin{aligned} (\delta_r f)(z) &:= \operatorname{Im}(z)^{-r} \frac{\partial}{\partial z} (\operatorname{Im}(z)^r f(z)) = \frac{rf(z)}{2i \operatorname{Im}(z)} + \frac{\partial f}{\partial z}(z), \\ (\varepsilon f)(z) &:= -\operatorname{Im}(z)^2 \frac{\partial f}{\partial \bar{z}}(z) \end{aligned}$$

で定義される. ここで

$$\frac{\partial}{\partial z} := \frac{1}{2} \left(\frac{\partial}{\partial x} - i \frac{\partial}{\partial y} \right), \quad \frac{\partial}{\partial \bar{z}} := \frac{1}{2} \left(\frac{\partial}{\partial x} + i \frac{\partial}{\partial y} \right).$$

もし f が \mathfrak{H} 上の正則関数であれば $\varepsilon f = 0$ が成り立つことに注意せよ. また, δ_k と ε は Petersson 内積に関して互いに随伴であることが知られている. 任意の非負整数 p に対して, 微分作用素 δ_r^p は帰納的に次のように定義される:

$$\delta_r^0 = 1, \quad \delta_r^1 = \delta_r, \quad \delta_r^{p+1} = \delta_{r+2p} \delta_r^p.$$

次の命題はよく知られている:

命題 2.2.1. (k, t) を $k > 2t$ をみたす非負整数の対とし, χ を $\operatorname{mod} N$ の Dirichlet 指標とする. このとき, 各 $\varphi \in \mathcal{N}_k^t(N, \chi)$ は次のような表示をもつ:

$$\varphi(z) = \sum_{j=0}^t (\delta_{k-2j}^j \tilde{\varphi}_j)(z). \quad (2.2)$$

ここで各 j に対して $\tilde{\varphi}_j \in \mathcal{M}_{k-2j}(N, \chi)$ であり, それらは φ に対して一意的に決まる. さらに, φ が任意の $\gamma \in SL_2(\mathbb{Z})$ に対して $B_0(y; \varphi, \gamma) = 0$ となるとき, $\tilde{\varphi}_j \in \mathcal{S}_{k-2j}(N, \chi)$ が成り立つ.

展開 (2.2) において, $\tilde{\varphi}_0$ は φ の正則射影と呼ばれる. φ の正則射影を記号で $\eta(\varphi)$ と書く.

2.3 非正則 Eisenstein 級数と Rankin–Selberg 級数

Rankin–Selberg 級数の積分表示を説明するために (非正則) Eisenstein 級数を導入する. h を整数とし, χ を, $\chi(-1)^h = (-1)^h$ をみたす $\operatorname{mod} N$ の Dirichlet 指標とする. このとき, Eisenstein 級数 $E_h^\chi(z, s)$ が

$$E_h^\chi(z, s) := 2L(2s + h, \chi) \sum_{\gamma \in \Gamma_\infty \backslash \Gamma_0(N)} \chi(\gamma) (\operatorname{Im}^s \parallel_h \gamma)(z), \quad (z, s) \in \mathfrak{H} \times \mathbb{C} \quad (2.3)$$

により定義される. ここで Im^s と Γ_∞ はそれぞれ

$$\operatorname{Im}^s(z) := \operatorname{Im}(z)^s, \quad \Gamma_\infty := \left\{ \pm \begin{pmatrix} 1 & n \\ & 1 \end{pmatrix} \mid n \in \mathbb{Z} \right\}$$

により定義される. 各 $z \in \mathfrak{H}$ に対して, 級数 (2.3) は $\operatorname{Re}(s) > 1 - h/2$ で絶対かつ広義一様収束する. 定義から $\gamma \in \Gamma_0(N)$ に対して $E_{h,s}^\chi \parallel_h \gamma = \bar{\chi}(\gamma) E_{h,s}^\chi$ が成り立つことがすぐに確認できる. ここで $E_{h,s}^\chi$ は

$$E_{h,s}^\chi(z) := E_h^\chi(z, s)$$

で定義される. Eisenstein 級数の Fourier 展開を計算することで, Eisenstein 級数が全平面に有理型に接続されることや, $1 - h/2 < m \leq 0$ をみたす整数 m に対して $E_{h,m}^X \in \mathcal{N}_h^{|m|}(N, \bar{\chi})$ であること, $E_{h,1-h/2}^X \in \mathcal{N}_h^{h/2}(N, \bar{\chi})$ であることがわかる. その詳細や Eisenstein 級数の極については, 例えば [1, §2.4] を見てほしい. Eisenstein 級数を用いた Rankin–Selberg 級数の積分表示は次で与えられる:

命題 2.3.1. $(f, g) \in \mathcal{S}_k(N, \chi) \times \mathcal{M}_l(N, \psi)$ とする. このとき $\operatorname{Re}(s) > \frac{k+l}{2} + l$ ならば

$$\begin{aligned} 2(4\pi)^{-s} \Gamma(s) D(s, f \otimes g) &= \int_{\Gamma_0(N) \backslash \mathfrak{H}} \overline{f(z)} g(z) E_{k-l}^{\bar{\chi}\psi}(z, s-k+1) y^k \frac{dx dy}{y^2} \\ &= \operatorname{vol}(\Gamma_0(N) \backslash \mathfrak{H}) \left\langle f, g E_{k-l, s-k+1}^{\bar{\chi}\psi} \right\rangle \end{aligned}$$

が成り立つ.

3 主結果の証明

この節で定理 A の証明の概要を述べる. k, l, N, χ, ψ などの記号は §1 を参照されたい.

3.1 Rankin–Selberg 級数の特殊値の平均

$g \in \mathcal{S}_l(N, \psi)$ とする. 整数 m に対して $\mu(m) := m - k + 1$ とおく. このとき, $g E_{k-l, \mu(m)}^{\bar{\chi}\psi}$ は概正則モジュラー形式である. 定理 A は, 後に述べられる命題 3.1.1 における $g E_{k-l, \mu(m)}^{\bar{\chi}\psi}$ の正則射影の Fourier 係数 $a_1(\eta(g E_{k-l, \mu(m)}^{\bar{\chi}\psi}))$ を具体的に求めることで証明される. 命題 3.1.1 は, 微分作用素 δ_r と ε が互いに随伴であることと

$$\left\langle f, \eta(g E_{k-l, \mu(m)}^{\bar{\chi}\psi}) \right\rangle = \left\langle f, g E_{k-l, \mu(m)}^{\bar{\chi}\psi} \right\rangle$$

に注意するとわかる.

命題 3.1.1. 定理 A と同じ仮定の下, 次が成り立つ:

$$\sum_{f \in \mathcal{B}_k(N, \chi)} \frac{a_1(f) D(m, f \otimes g)}{\langle f, f \rangle} = a_1(\eta(g E_{k-l, \mu(m)}^{\bar{\chi}\psi})) \frac{(4\pi)^m \operatorname{vol}(\Gamma_0(N) \backslash \mathfrak{H})}{2(m-1)!}.$$

3.2 Fourier 係数 $a_1(\eta(g E_{k-l, \mu(m)}^{\bar{\chi}\psi}))$ の計算

講演では時間の都合上, Fourier 係数 $a_1(\eta(g E_{k-l, \mu(m)}^{\bar{\chi}\psi}))$ の計算については全く述べられなかったため, 本稿で説明したい.

条件 $1 - \frac{k-l}{2} \leq \mu \leq 0$ をみたす整数 μ をとる. もし $g \in \mathcal{S}_l(N, \psi)$ ならば, $g E_{k-l, \mu}^{\bar{\chi}\psi}$ は概正則モジュラー形式である. より具体的には $g E_{k-l, \mu}^{\bar{\chi}\psi} \in \mathcal{N}_k^{t(\mu)}(N, \chi)$ が成り立つ. ここで

$$t(\mu) := \begin{cases} |\mu| & \text{if } 1 - \frac{k-l}{2} < \mu \leq 0, \\ \frac{k-l}{2} & \text{if } \mu = 1 - \frac{k-l}{2} \end{cases}$$

とおいた. 任意の $\gamma \in SL_2(\mathbb{Z})$ に対して, $B_0(y; gE_{k-l,\mu}^{\bar{\chi}\psi}, \gamma) = 0$ であることに注意する. いま, $k > 2|\mu|$ なので, 概正則モジュラー形式 $gE_{k-l,\mu}^{\bar{\chi}\psi}$ に命題 2.2.1 を適用すると, カスプ形式の族 $\{\tilde{\varphi}_q^{(\mu)}\}_{q=0}^{t(\mu)}$ で次をみたすものが存在することがわかる:

- 1) $\tilde{\varphi}_q^{(\mu)} \in \mathcal{S}_{k-2q}(N, \chi)$,
- 2) $gE_{k-l,\mu}^{\bar{\chi}\psi} = \sum_{j=0}^{t(\mu)} \delta_{k-2j}^j \tilde{\varphi}_j^{(\mu)}$.

特に

$$\tilde{\varphi}_q^{(\mu)} = \frac{2^{2q}}{q!(k-2q)_q} \varepsilon^q \left(gE_{k-l,\mu}^{\bar{\chi}\psi} - \sum_{j=q+1}^{t(\mu)} \delta_{k-2j}^j \tilde{\varphi}_j^{(\mu)} \right) \quad (3.1)$$

が成り立つ. これから Fourier 係数 $\{a_1(\tilde{\varphi}_j^{(\mu)})\}_j$ に関する漸化式を得る.

以下, 条件 $1 - \frac{k-l}{2} < \mu \leq 0$ をみたす整数 μ について, Fourier 係数 $\tilde{\varphi}_j^{(\mu)}$ を計算する. $\mu = 1 - (k-l)/2$ のときも同様である.

定理 3.2.1. μ は $1 - \frac{k-l}{2} < \mu \leq 0$ をみたす整数であるとする. このとき次が成り立つ:

$$a_1(\tilde{\varphi}_j^{(\mu)}) = \frac{2^{|\mu|+1} (2\pi)^{|\mu|} i^j \pi^{-j} (k-2j-1) L(k-l-2|\mu|, \bar{\chi}\psi)}{(k-|\mu|-j-1)_{|\mu|+1}} \binom{|\mu|}{j} a_1(g), \quad 0 \leq j \leq |\mu| - 1,$$

$$a_1(\tilde{\varphi}_{|\mu|}^{(\mu)}) = \frac{2(2i)^{|\mu|} L(k-l-2|\mu|, \bar{\chi}\psi)}{(k-2|\mu|)_{|\mu|}} a_1(g).$$

特に正則射影 $\eta(gE_{k-l,\mu(m)}^{\bar{\chi}\psi})$ の Fourier 係数 $a_1(\eta(gE_{k-l,\mu(m)}^{\bar{\chi}\psi}))$ は次で与えられる. 命題 3.1.1 と次の系から定理 A(1) が完全に証明される:

系 3.2.2. 条件 $\frac{k+l}{2} < m < k$ をみたす整数 m に対し, $a_1(\eta(gE_{k-l,\mu(m)}^{\bar{\chi}\psi}))$ は

$$a_1(\eta(gE_{k-l,\mu(m)}^{\bar{\chi}\psi})) = \frac{2^{k-m} (2\pi)^{k-m-1} (k-1) L(2m-k-l+2, \bar{\chi}\psi)}{(m)_{k-m}} a_1(g)$$

で与えられる.

定理 3.2.1 を証明する. 式 (3.1) から $\{\tilde{\varphi}_j\}_j$ が以下の漸化式をみたすことがわかる:

$$a_1(\tilde{\varphi}_q^{(\mu)}) = \frac{2(2i)^{|\mu|} L(2\mu+k-l, \bar{\chi}\psi) \delta_{q,|\mu|}}{(k-2|\mu|)_{|\mu|}} a_1(g) - \sum_{j=q+1}^{|\mu|} (2\pi i)^{j-q} \frac{(k-j-q)_{j-q}}{(k-j)_{j-q}} \binom{j}{q} a_1(\tilde{\varphi}_j^{(\mu)}).$$

また,

$$\tilde{\varphi}_{|\mu|}^{(\mu)}(z) = \frac{(2i)^{|\mu|}}{(k-2|\mu|)_{|\mu|}} g(z) E_{k-l-2|\mu|}^{\bar{\chi}\psi}(z)$$

が成り立つことが容易にわかるので, Eisenstein 級数の Fourier 展開から $a_1(\tilde{\varphi}_{|\mu|}^{(\mu)})$ が計算される. 定理 3.2.1 はこれと上の漸化式を用いて数学的帰納法により証明される. その際次のような有理関数の恒等式を証明する必要があった:

$$\Phi_r(s) := \sum_{j=0}^r \frac{(-1)^j (s-2j+r)}{(s-j)_{r+1}} \binom{r}{j} \equiv 0. \quad (3.2)$$

ここで $(\alpha)_n$ は Pochhammer 記号である. 二項係数の計算から $\Phi_r(s)$ は等式 $\Phi_r(s+1) = \Phi_r(s)$ をみたすことに気づく. 周期をもつ有理関数は恒等的にゼロであるから (3.2) が示される.

謝辞

講演の機会を与えてくださったオーガナイザーの金子昌信先生, 権寧魯先生, 岸康弘先生にこの場を借りて心より感謝申し上げます.

参考文献

- [1] K. Gejima, *An average of special values of Dirichlet series of Rankin–Selberg type*, Ramanujan J. (2019), doi:10.1007/s11139-019-00166-9.
- [2] D. Lanphier, *Combinatorics of Maass–Shimura operators*, J. Number Theory **128** (2008), no. 8, 2467–2487.
- [3] A. Ohta, M. Yagi, K. Gejima and T. Moriyama, *On an average of critical values of Rankin–Selberg L -functions*, preprint, 2018.
- [4] G. Shimura, *The special values of the zeta functions associated with cusp forms*, Comm. Pure Appl. Math. **29** (1976), no. 6, 783–804.
- [5] G. Shimura, *Elementary Dirichlet Series and Modular Forms*, Springer Monographs in Mathematics, Springer, New York, 2007.
- [6] G. Shimura, *Modular Forms: Basics and Beyond*, Springer Monographs in Mathematics, Springer, New York, 2012.